
出来ること、ぼく頑張る

零月零日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

出来ること、ぼく頑張る

【Zコード】

Z9810T

【作者名】

零月零日

【あらすじ】

裏世界を牛耳るお嬢様「傲慢」。金さえ払えば誰であろうと殺し
てみせる殺し屋「強欲」。夢見がちな放火魔「憤怒」。脳みそから
つま先まで完璧に擬態する道化師「嫉妬」。血肉を喰らつて骨を残
す殺人鬼「暴食」。そして、まじめにハーレムを考える高校生「色
欲」。

そんな君と彼女と彼と、「怠惰」な僕の物語。

プロローグ

「舐めなさい」

そう言つて彼女は、僕に靴の先を向けて來た。

深夜のお嬢様の部屋で、僕は一人特別に呼び出されている。

彼女の足は、強く力を入れれば折れてしまいそうなくらい細く、白磁のように白く美しい。

その白い肌と対照的な黒曜石のような輝きを持った黒い靴。僕以外の従者達がいつも必死で磨いているソレを向けて来る彼女。

僕は言られた事がよく分からなくて、一瞬ぽかんとしてしまった。

「ほり、さつわとしなさいよ愚図ー。」

「はい、お嬢様」

すぐに思い出したように返事をした。一度目はない。

僕は躊躇せずに片膝を付き、恭しく彼女の御御足を持ち上げ、その靴に舌を這わせる。

僕の唾液で靴が汚れて行くと言つのに、彼女は実に満足そうにその様子を眺めていた。

「本当にするなんて、あなたって根っからの犬みたいね」

僕が犬のよろべ口ペロ舐めるのを罵倒しながら、軽蔑の視線で見下ろしてくる彼女。僕は黙つて靴を舐める作業に没頭した。

正直、汚れなんてあるはずもない靴だ。僕以外の普通の従者が、いつたい靴磨きだけで何人首切りに合つた事だろう。そんな訳で、

この靴は従者の血と汗と涙の結晶、綺麗でないはずがないのだ。強いて言うなら、僕が舐める事によつてどんどん汚れて行くだけの靴だ。

靴が唾液でテカテカと光るようになると、彼女は僕を止めた。そして徐に靴を脱ぎ、そのまま靴下も脱ぎ捨てる。そのまま上まで脱ぎ出すんじゃないかと言つ脱ぎつぱりだった。

彼の人形のように纖細で華奢な足が露になり、そして、
僕を踏みつけた。

「…………

僕は意識して声も息も出さぬようにしていた。

彼女がタバコの火を消すようにぐりぐりと頭を踏みつけるものだから、僕は床に顔を付けられていた。ぐりぐりと好きでもない床に頬擦り。床だつて僕の事を好きじゃないだろうに。

足の裏に触れる僕の髪がくすぐつたいのか、彼女は小さく笑い声を上げていた。いや、僕を踏みつけて悦に入っているのか。

「本当、あなたつて馬鹿みたいに従順ね。前世は犬？ それとも騎士？ ごめんね、馬と鹿だつたわね。……それとも、じうじうのが趣味なの？ とんだ変態ね」

足の指で僕の髪をこねくり回し、言いたい放題に僕を罵倒する彼女はとてもご満悦。

僕は黙つて床と頬を合わせて、仲良しこよし。
と、不意に彼女が足を上げた。

それに釣られて、つい僕も視線を上げてしまった。やばい、命令違反だ、怒られる。踏みつけられるかもしれない。

そんな僕の思考は良い意味で裏切られ、彼女はそれについては何も言わなかつた。踏みつけもしなかつた。

ただ。

人形のようになに整った足の指を僕の口に押しあて、彼女は妖艶な笑みを浮かべて僕に命令した。

「しゃぶりなさい」

僕は命令に従うしかない。

それが僕と彼女の関係。主従関係。でもさ。

オカシイな、僕は執事としてこの家に来たのに。これじゃあまるで、奴隸じゃないか。

だが、別に構わない。

法外な給料、自分の家、高校生活、それらを『貰ってくれたのだ。だから。

「…………」

「んっ」

返事は、言葉ではなく口でします。

彼女の足の指を、僕の唾液付けにでもしてやろうか、と言わんばかりに舐め回す。

爪の今まで抉るように舌を蠢かせ、アイスキャンディーでもくわえるように彼女の親指をしゃぶる。

彼女は照れなのか、くすぐったさなのかよく分からぬが、扇情的な笑みを零す。

欲情し頬を火照らせ、欲望を言葉で表す。

ああ、君はいつもそうだ。

君はいつでもそうさ。何にも知らないように笑って、感情のまま

に生きてさ。

笑つて、泣いて、怒つて……欲情して激怒して。

僕はそれがさ、

凄くムカつくんだよ。

押し競饅頭よろしく、通勤電車の中はひつた返している。

押されて泣くなと言わても泣きたくなる、田舎育ちの僕には信じられない程の人が一台の電車の中に詰め込まれていた。

けれども、それが僕らの日常だ。人間は学習する生き物みたいで、この通勤電車の風景にも慣れてしまっていた。

慣れつて恐ろしい。

電車内的人は皆、楽しくない仕事や勉強のためだろう、死んだような目で俯いている。仕事が面白い人は人生得してるな、なんて思つてしまふくらいだ。

僕はそんな車内で一人浮いている。

いや、それつて車内に限つた事じゃないかもしれないけど。と。

「…………や…………て…………さい」

電車の振動音に混じり、か細い声が僕の耳に届いた。

その微かな声がした方へと顔を向ければ、ドアの付近に外を見ているが体の良い男がいる。

そして、その男の影に微かに女の子が見えた。良かつた、やつぱりあの声は女の子のものだつたか。もしあのか細い声が男のものだとしたら、天地がひつくり返つたか僕の耳が腐っているかのどちらかで、後者だつたときは耳鼻科に行こうつと思つていた。

そんなどうでも良い事は置いておき、僕は溜息をついた。何がどうなつてているのか、何となく解つてしまつた。

女の子が視界に入る位置に何とか移動。迷惑そうに周りの人達が僕を睨んだけど、愛想笑いで誤魔化す。この偽善者どもが。

見れば、女の子はそこそこ有名な女子校の生徒だった。男の影に

隠れているが、背中に氷でも入れられたようにピクリと肩を揺らしているのが見える。別に車内は冷房の効き過ぎで寒くはない。

と、少しだけ大きな揺れがあり、男の影に隠れていた女の子の顔が一瞬見えた。

セミロングの茶色の髪、清楚な印象を受ける少女だった。美しいと言つよりは、可愛いと言う感じの女の子だ。

顔が見えたのはほんの一瞬で、再び女の子の顔は人ごみの中に消えてしまった。

結局、周りは誰一人見向きもしなかった。

よく見れば、少女の周囲にいる人は皆イヤホンを耳に、携帯やら新聞などを見ている。というか、最近では両方をしていない僕のような方が珍しいかも知れないな。

聞こえていないのなら仕方ない、な。本当、聞こえてないのなら仕方ない事だよ。

本当に聞こえていないのなら、ね。

男が幸運なのか、それを知つての常習犯か、そんな事はどうでも良い。どちらにしてもアレは痴漢で犯罪だ。

で。

『だからって、お前が出しゃばつてどうするんだ?』

女の子を助けてヒーロー面か?

助ければお前は彼女に取つてヒーローになれるかもしれない。その可能性は捨てきれないだろう。お前の姿なら、なんとかお世辞で白馬の王子様って言えるかもな。

だが考えてみる、そのためにお前は一人の男の人生を狂わせる事になるんだぞ。

お前が言った事じゃないか。痴漢は犯罪だと。

容易に想像出来るはずだ。会社を首になつて、社会的地位を失つ

たあの男の末路を。

お前にはその責任を背負う覚悟があるか？

一人の男を不幸にする、その覚悟があるか？

男だけじゃない。男には養う家族も居るかもしれないぜ？

不特定多数の人間が、幸せにはならないんだ。

ここでお前が黙つて、あの子が降車駅に着くまで我慢すれば、一人の男は今不幸にならずに済むんだ。黙つていれば、一人が辛いを思いをするだけで全てが円滑に進むんだ。

いつも通りが過ごせるんだ。

一人の人生と、ほんの少しの通勤時間。天秤にかけるまでもないだろ。

それになにより……恥ずかしいだろ？

痴漢を罪にするためには、お前は大勢の前に出なければならない。たくさんの視線を浴びる事になる。最初は奇異な者でも見る目さ。次に品定め。お前と言う人間を評価する見る目さ。お前が何を思つてそんな行動を起こしたのか、探るように見てくる。結果はきっと、下心丸出しな奴つて判定だろうな。

それつてさあ、凄くこの電車乗りづらくならないか？

お前、いつつもこの時間の同じ車両に乗つてるだろ？

周りのお前を見る目が変わるよな。

言い出さなければ、お前は普通として、ただの一般人として見られる。

普通が一番良いだろ？

普通に働いて金を稼いで、普通に飯喰つて、普通に結婚して、普通の家庭を築く。普通の生活。何一つ特別な事は必要ない。周りと同じ。

一個人になつたら、お前の評価はお前一人で背負わなきやならない。

ここで何も言わなければ、なんで助けないと言われても、皆そうだからって言い訳出来る。

普通は黙っている、ってわ。

だけど、ここで助けてしまえば、もつお前には引く事は出来ない。一度助けて二度目助けなければ、お前は人の顔を見て助ける助けないを判断した奴だと思われる。最低、なんて評価を受けるかもしれないな。所詮偽善か、ってさ。

お前には、それは辛いだろ？

……それに、気付いてるか？
お前が助ける義務なんてないんだ。
だからな？

見て見ぬ振りでもしていよう。

……そうだ。

そうだ、悪いのはあの子だ！
僕が助けないのは、悪くない。

大声で助けを呼べば、僕じゃないもつと近くに居る奴が気付いて止めるだろ。

痴漢が怖いなら女性専用車両に乗れば良い。

それに本当に嫌なら、男の手を掴んで頭上に持ち上げてこう叫べば良い。

「この人痴漢です！」
つてや。

そうすれば男も言い訳出来ないし、次の駅で駅員に引き渡されて、めでたしめでたしさ。車内の居心地の悪い雰囲気も無くなるし、あの男の魔手に引っかかる人も居なくなる。

そうだ、悪いのは言い出せないあの子だ。

話では、痴漢にあつた女の人は九割が言い出せないそうじやないか。

誰もが通る通過点と考えればいいだろ。

僕が悪いわけじゃない。
僕が助ける必要はない。
だから……。

「この人痴漢です！」

僕は男の手を掴み持ち上げてはつきりと口にした。僕の声が変に静まり返った車内で反響する。どうしたことか、皆がこちらを見て静まり返ってしまっていた。

更に恐ろしい事に、周りから人がどけて行き、通勤電車内とは思えない程の空間が出来た。その中心に僕ら。最初は奇異な者を見るような視線。

「なつ！？ なんだ君は！」

男は僕を見て驚いた。女の子も似たような感じだったけど、こちらは前者に比べて割合嬉しそうだつた。でも九割九分を驚きが占めている。

男の驚いた声に感化され、周囲が少しずつざわめきを呼び始める。皆の視線が僕、男、女の子に集中する。

品定め。

舐め回すような視線に嫌気が指す。

僕が次になんと言いく出すか気兼ねていると、駅に着いてしまった。

「失礼だな！ 大人をからかうんじゃない！」

と男は無理矢理僕の手を払うと、脱兎の如く電車から降りて行く。速かつた。改札めがけて脱兎の如く走っていた。体系が体系だから、もの凄く速く見えてしまった。

呆気にとられて、僕は何も捕まえてない手をじっと見つめるしか出来なかつた。その間に車内の入れ替わりが行なわれ、全てがうやむやに終わつてしまつた。

先に乗つっていた人達は再び視線を落とし携帯や雑誌に目を向け、乗り込んで来た人達は怪訝そうな顔で僕を見る。

そういう人を上から目線で評価するような目が僕は大嫌いだつた。
……なにはともあれ、これでいいか。

別に男に罰を与えたかった訳じゃないから、男が逃げてくれても僕としては満足だつた。

とりあえず、女の子を助けられたのだから。
羞恥心なんて知つたこつちゃないわ。

さあて、僕も一般人に戻ろう。
精神的に辛いものがやつぱりあるんだな、社会の先輩達からの視線は。
線は。
と。

そう思つていた僕の制服の袖が軽く握られた。

……解つている。一人だけは、他と違う反応をするのは。

僕は深呼吸し、普通を装つて振り返つた。

袖を握つていたのは、女の子だつた。

「あ、あの、ありがとうございます！」

そう言つて小さく（通勤電車内で迷惑にならない程度の小さな）お辞儀する女の子。

それを目の当たりにして、僕は……。

「……どういたしまして」

僕はもう女の子を直視出来なかつた。だから俯いてそう言つた。
恥ずかしいから、女の子の顔を真つ直ぐ見れなかつた。

昔、何も出来なかつた自分が、凄く恥ずかしかつた。

見て見ぬ振りをしていた自分を見直して、改めてそう思つたのだ。恥ずかしいからと何もしなかつた自分が、凄く恥ずかしかつた。簡単な事だよ？

ただ男の手を掴んで、叫ぶだけだつたんだぞ？ なんで言えなかつたの？

そんな言葉が頭の中を巡る。

……まあ、もうどうしようもないんだけどさ。

「これから、自分で言つんだよ？」

「え？ あの、えつと……」

僕の咳きに、女の子は首を傾げた。

僕が何を言いたいのか理解出来ていないようだ。

対して僕は壊れた機械のように、奇怪な言葉を喋り出した。

「だから、痴漢に合つたら、自分で言つの！ 『この人痴漢です！』

つて、なるべく大きな声で。言えないといつまでもするすると痴漢に遭うよ？ 味を占めるだろうからさ。僕も気付いたら助けようとは思うけど、気付けなかつたら助けられないからね？ だけど、別に僕だけが君を助けられる訳じゃないんだからさ。『この人痴漢です！』つてちゃんと言えば、見て見ぬ振り、気付かぬ振りをしてた人達でも嫌でも助けてくれるから。見栄とかプライドとかでさ。本当、腐つた性格してるよ。『なんで助けなかつたの？』つて聞いたら皆平氣で答えるんだ。『気付かなかつたので』つてね。その理論を正論とするために携帯とかで音楽を聴いてるんだ。勿論、素直に音楽を聴きたいって人も居るかもしれないけどさ。でもさ、せつかく色々な立場の人達が集まっているのに、個人の世界に引きこもつてるとか勿体無くない？ 話とかすれば良いのにね。わざわざネットの掲示板なんか使わなくたつて、目の前に話せる人は居ると思

わぬいか？面白いと思うんだけどさ、色々な職業の人達がお喋りするのは。恥ずかしいとか言つてたら、何にも出来ないしさ。たつた一度の人生で恥ずかしいも何もないと思うんだけど……」

と、気がつく。

僕は何を宣つているのか、と。

5W1H。

いつ（when）、どこで（where）、だれが（who）、なぜ（why）、なにを（what）、どうした（how）。

通勤時、電車内で、僕は、照れ隠しから、大声で心中を、吐露していた。

不自然なまでに静かな車内。

やけに冷たく感じる空気。

恐る恐る視線を少女から逸らせば、車内が再び静まり返り、皆が僕を凝視していた。

不思議と、僕は落ち着いていた。

小さく深呼吸をし、僕は思考を時空の彼方に吹っ飛ばす。

これはなんていうか、そう、いつものことだ。

なあ、昔の僕。

お前の言つている事は凄く共感出来る。まあ、過去の僕自身の意見だからな。

普通に生きるのは凄く魅力的だ。特別だつたら、出る杭と見られて打たれるからだろうな。

世間の風が冷たいのは、とっても生きにくい。
僕だつて、出来る事ならそれに従いたかった。

けどさ、それって僕が普通である事が前提な話だよな。

僕が普通？

ははっ、そんなわけないじゃないか。

一つでも狂つていたらさ、もういくら狂つたって同じじゃないか。
それにさ、何が男が不幸になるだよ。

この国は資本主義社会さ。皆がみんな、他人を蹴落として自分の
幸せを掴むために生きてるんだ。

資本主義社会じゃ幸せなんて、椅子取りゲームでしかないんだ。
椅子取りゲームで椅子を奪つた事を詫びるか？

違うだろ、それは椅子を取れなかつた奴の実力不足つてことでお
しまいだろ？

僕が他人の幸せを考える必要なんて皆無。皆がみんな、自分の幸
せを考えて好き勝手生きてるんだ。

だから、僕は他人のことなんて考えて生きる必要なんてない。
好き勝手生きて行けば良いのさ。その過程で僕以外の誰かが幸せ
になつたら儲け物、つてな考え方だ。

他人が不幸になる事を考えてたら、何にもできない。

本当にそんなことを真面目に考えているんだつたらさ、

『私の呼吸などの生命活動で地球環境を壊してごめんなさい、非生
産的存在的私はさつさと誰の迷惑にもならないように死にます』つ
て結論になるだろ。けどそんな事はしないだろ？

止めとけよ、結果的に誰も救えないようなそんな偽善は。

皆が好き勝手に生きてる世界で一人そんな事をしていくも馬鹿み
たいだろ？

だからな、昔の僕。

僕は好き勝手に生きるんだ。

他人の評価？ 知らないな。

僕は僕が幸せなら、他が何であらうと構わない。

皆がうつやつて生きてるのが、資本主義社会だろ？

「わかった？」

思考を現実に戻して、僕は田の前の女の子に話しかけた。

「えつ、あ……、えつと」

突然話しかけられ戸惑う女の子に、僕は追い打ちをかける。
顎に手を添え、僕の顔と向き合えるようにシイツと顔を持ち上げる。

「だからさ、君が本当に痴漢が嫌なら、ちゃんと言わなきゃ駄目なんだよ？」

あわわわ、みたいな感じに視線を泳がせて、ぽんつ、みたいな音と共に赤面する女の子。

ほらね、嫌なら言わなきゃ駄目なんだよ。
僕みたいな奴が調子に乗っちゃうから。
なんて言つたか、理性が崩壊しそうなんだよなあ。

「ほら、嫌なうどうするか教えたでしょ？」

僕は女の子の耳元で囁く。悪魔の囁き。
女の子はくすぐったそうに肩を震わせる。
……耳をはむはむしたいなあ。

と、電車は僕の降車駅に到着。

「……はあ、氣をつけるんだよ？」

僕はただ咳いて颯爽と電車を降りる。
そして、決して走つているようには見えない速度で逃げ出した。
いや、だつて痴漢に間違われたら嫌だし。
冤罪、とは言えなくもないから。

「おはよひ」「やあこまく」

「はい、おはよひ」

先生と挨拶した。社交辞令。

「おはよひ」

「……」

同級生には無視された。鬱陶しへ。

「おはよひ」「やあこまく」

「ん

先輩は会釈してくれた。まんざらでもなさそうだ。

「おはよひ」

「え？ あっ、……お、お、おはよひ」「やあこまく」

後輩はじどりむじうながらも挨拶してくれた。可愛いなあ。

「……お前、まだそれやつてんのかよ」

「挨拶は大事でしょ」

校内ですれ違った人皆に挨拶をするのは、もはや僕の習慣になりつつ合つた。とこうか、習慣にした。

……嘘付きました、校内だけじゃないです。

通学時とか、帰宅時とか、休日とか、隙あらば挨拶してる。全く知らない人でも。

恥ずかしい？ いや、別に。むしろ挨拶しなかった事の方が恥ずかしくなって来た。

わかつてる、狂つてるんじゃないかつて事は。

やり始めた当初は挨拶しても無視される方が多かつたけど、最近

は結構挨拶を返してくれる人が増えて来た。

……そんな気がする今日この頃。

挨拶し始めた当初の通学時には、すれ違った別の高校の生徒とかに指を指されて笑われた。良い話の種になれたようで、僕としては満足だつたりしたのだが。

けど、毎日同じ時間に挨拶を続けていたら、そういうものなのかなって思われたのか、挨拶してくれるようになつていた。別の高校の生徒と挨拶する仲つてのは、存外悪くない。人間関係が広がるのは、なかなか面白いものだ。

僕は意図的にいつも同じ時間に通学しているんだけど、その時間に合わせられなかつた日がある。で、その次の日、いつも通りにその時間に通学したら、すれ違つた人に『昨日はどうでしたんですか?』つて話しかけられたんだ。

なんか、凄く嬉しかつたのを覚えてる。

そして、計画通りとほくそ笑む僕がいた。
達成感で舞い上がりそつだつた。

「……本当、お前変わつたよな」

そう言われる度に、僕はしれつと答えている。

「変わらない人なんて居ないだろ」

一ヶ月前から僕にそう話しかける奴は増えて來た。というか、高校生活一年目で初めて話しかけてくる奴も居る程だつた。

とか言つておいてなんだが、今話しかけて來た奴はそうではなく、幼なじみの親友だ。

短めのツンツン茶髪で、軽めな感じ。僕もこいつもそんなに背は高くなく、二人で嘆いている。

小中高とクラスのムード迷カーポジションに居座り続けている

だけ合つて、かなり人当たりがいい奴。誰にでも話しかける奴だけ
ど、何故だか僕とは良く喋つており、いつの間にか親友になつてい
た。

「確かに変わらない奴はいないけどな、お前みたいに突然変わる
ような奴もそうそういねーよ」

「ううかな？」

変わることは突然だと思つんだけ。思い立つたが吉田つて言つ
じやん。

それに、

「あと一年しかないからな」

「ん？ ああ、高校生活か？ そつだよな、もう一年経つたら受験
勉強で青春どころじゃないもんな……。高校生つていう身分での青
春を謳歌したいってのも解るわ。大学生と高校生じゃ同じ青春で
も、なんか違うよな）。大学生は、青春つて言つより、紺春つて感
じ」

「ううかも。おはよ！」

「「「おつ、おは、おはよ！」れこますー。」「」

親友の話は話半分、僕は後輩の集団に挨拶。

さすが高校一年生。後輩はみんなもりながらも敬意を表して挨
拶してくれる。

きつと恥ずかしいだらうけど、慣れてくれ。あと一年だけだから。
そしてここにも恥ずかしがつている奴が一人。

「……おい、恥ずかしいから離れて歩いてくれ
しつしと手を振り、顔を引きつらせる親友が。

羞恥心に負けないよ、僕。

「…………あれ」

やめてください、そんな……。それはさすがに……。
良いではないか、減るものじゃあるまいし……。
お代官プレイ? 変わった趣味……。

「起きるー!」

バンツと机が強く叩かれ、僕は目を開けた。
目の前に立っていたのは、三十代後半の男。スーツ姿で、教本を
片手に持っている。それが僕の机を傷つけた獲物か。引き裂いてや
るつか?

「つたく、お前、どうしたんだ? 一年に進級してから碌に授業聞
いていないだろ!」

僕が立ち上がりて教本を引き裂くのより速く(もとよりそんな気
違いの真似をするつもりはないし、教本は厚くて引き裂けないだろ
うけど)、男、数学の教師は鼻息荒く顔を真っ赤にして文句を言い
出した。その鼻息の荒さ、風力発電でも出来そな程に。その怒り
で真っ赤な顔、田玉焼きでもやけそな程。

エネルギーの無駄だな、僕を怒つたって誰も幸せにはならないの
が解らないのか? もっと効率よくエネルギーを使えよ。まあ、ス
トレス発散は大切だけどさ。

「去年のお前は授業中寝るような奴じゃなかつたぞ? 授業を真面
目に受けて遅刻欠席もなし、成績も文句無し。模範生の鏡と言つて

も良かつた

模範生の鏡は、ただの模範生でしょ。いや、鏡で反転されて今に至つたと考えれば、その表現は言い得て妙かも。

「それがなんだ？ 遅刻欠席は一学期だつてのに週に一回はある。授業に出たと思えば寝てるし。中身が入れ替わりでもしたのか？」

入れ替わりはしないけど、中身が変質したかもしだせんね。

どうにもこの先生、この他の先生の意見も代弁してくれたようだ。かなり長つたらしく、一年のときの僕を褒めて、それこそ他の先生がどう僕を評価していたのか詳しく語ってくれ、そして今の僕の怠惰な様を否定する。要約すれば、一年の僕と今の僕を比較して前に戻れと言つ事だった。

「「」なんなんじやど」の大学も受からんぞ！ 僕は知らんからな！」

そう締めくくつて教壇へと戻る先生の背中に僕は語りかけた。聞こえないのを装つた、でも聞こえる程度の声量で。要は、嫌味つたらしく聞こえるように。

「僕が勉強しているのは、大学に入るためにでも、良い成績を取るためにでもないんですよ。……だからあなたの授業は詰まらない」

大学受験のための勉強なんて面白くない。僕は雑談を踏まえた授業を求めているんだ。歴史ならその事件に対する個人の見解を教えてほしいんだ。どんな事件が遭つたかなんて、教科書読んでたら解るんだから。そんなのわざわざ授業料出して学ぼうとは思わない。僕が授業料を払つて学んでいるのは、歴史的事実に対してもどのよくな個々人の意見があるかなのだよ。

数学で言えば、この数式で現実の何が解明されるか、何に役立つとかを教えてほしいんだ。この数式はこの公式を使えば簡単に解ける、まあ計算してみる……って、馬鹿にしてるのか？ 問題集でも読んでたらそんなの解るわ。

ビキリと先生の額に青筋が浮かんだ、ような気がする。たとえ浮かんでいなかつたとしても、心境ではそんな感じだろう。そこで僕は笑みを浮かべた。

「……先生は優しいですね。僕のような出来の悪い生徒のためを思ってくれて。先生のそういう所、尊敬します」

言い方とかやり方は残念ですけど、という言葉は飲み込んだ。勿論、先生のそういう所『は』というのもだ。

「うう……」

と、先生がどもるのを見て、本当にそういう所は嫌いじゃないんだよな、と心の隅で思つ。

だが、飴と鞭。

「でも僕は、公式を習いに来てるんじゃないんですよ。あなたの授業は、教科書や参考書を読んでいるのと同じだ。正直、授業料を払つて受けるまでもない。だけどそれじゃあ、先生は給料をもらえない。だから僕は形ばかりでも授業に参加してるんですよ。これ以上僕の機嫌を損ねるようななら、校長に直訴して先生の給料下げてもらいますよ？」

先生は顔をこれ以上ないくらい真つ赤にして、そして一瞬のうちに青くして教壇に戻つていた。

さあて、これでもう話しかけては来ないだろう。

僕は惰眠を貪りつかな。

他の生徒の視線など気にしない。どうせ皆も寝ているだろうし。

まへじた出來の事 a・3 (後編)

評価や感想を頂けると幸いです。

「僕は目的のある人生に憧れてた
「……はい？」

帰宅途中のバスの中、僕は隣の女の子に話しかけていた。
セミショートの黒髪、ジト目で僕を見る僕よりも小柄な女子高生
だ。見た感じ、高校一年生だろう。

ちなみに今は、電車で家のある郊外の町まで戻つて来て、その駅
から家付近までのバスに乗つた所だ。

「生きている意味とか、運命とかそんな大した話じゃない。ただな
んとなく、こうなれば良いなって未来を持つてゐる事、それを望んでた。
簡単な話、家を建てたいとか結婚したいとか、比較的明確な夢を持
ちたかったんだ。僕の人生つて、幸せからどんどん底にたたき落とされ
たもんだからさ、そんな些細な願いも抱けなかつたんだ」「
……」

何言つてんだこの人、という刺々しい視線を感じながら、僕は独
り言のように語りかける。つんつんした態度でありながら、僕の言
葉に耳を傾けてくれるいい人だ。ツンデレではないと思う。
僕がそのどん底から這い上がつたのは、目的が生まれたから。
もしもあの時、その目的が生まれなかつたら……。
僕は狂わずに済んだだろう。

「ある日、ひょんな事から僕は目的を持つた。憧れていた目的を持
つて、本当に叶えたいと願つた。けど、それは間違いだった」

本気で叶えたいと願つたから。

その目的を本氣で達成しようと思つたから。

「僕は手段を選ばなかつた。それは、大きな過ちだつた」

ああそうだ、僕は悪魔の囁きに負けたのだ。
それが罪だつたのだ。

「それを達成してみて、待つてたのは達成感、一瞬の幸せだけだつたのにショックを受けたよ。こんなもののために、僕は何を本気になつていたんだろうつてね。そこで初めて解つたんだ」

僕がその目的を達成するために捨てた代償は、あまりも大き過ぎた事に。

尤も、それに見合つだけの力は得たのだけど。
けれど、それでも、失つたものは大き過ぎた。

「この世界は死にたくなる程の苦痛と、胸を引き裂かんばかりの悲しみ……そして、それらが報われる一瞬の幸せで構成されていると」

ハッピーホンドは恒久的な幸せだ。

だが人生にはハッピーエンドは無い。それはその^{エンド}結末が死であり、愛したり愛してくれた人との別れだからだ。

「その一瞬の幸せつてのは、苦労することにより昇華されるんだ。
碌な苦労もせずにつかみ取つた幸せは、下ごしらえしてない高級食
材みたいなもんなんだ。味気なくて、ショックが大きい。『こんな
もののために……』ってね」

僕が本気で叶えたいと願つた目的は、今となつてはまさに『こん
なもののために……』だよ。

こんなもののために、僕は何故狂わなければならなかつたのか、後悔しまくりだ。

だからお節介かもしれないけど尋ねるよ。

「じゃあ、原点回帰。君には目的とかある？ 本気で叶えたいよう

な願い」

「……いえ」

その素っ気ない、ビリビリとした返事に僕は安堵の笑みを浮かべる。

そうだ、僕のような過ちは繰り返されではならないのだ。

「良かった。言っちゃ何だけど、そんな願いを持つ人はクレイジー、狂っているのや」

そう、そんな願いを持つてしまった僕はやはり狂っているの。

そうさ、初対面の女子にこんな話をする奴が狂っていなくて、一体誰が狂っているって言つんだ。

けれど。

「狂つたからと云つて、幸せを諦める必要なんてまるでない。むしろ狂つたのだから、そこから勝ち取れる幸せは格別のものだと思うんだ」

幸せってのは、幸せと絶望の高低差が激しい程、至福のものになると想つ。

まあ、狂つた以上、何が幸せなのかも狂つてしまつたのだけど。

郊外の安い土地、住宅街から離れた場所に僕の家はある。門と柵で侵入者を許さない、三階建ての自慢の我が家だ。

たっぷりと頂いた給料で建てた僕の家は、彼女の屋敷に比べれば犬小屋程度だが、一般的な価値観を持つてみれば金持ちの家と呼ばれる部類だ。彼女の家が豪邸なら、僕の家は邸宅だろう。

「ただいま」

返事が返つて来る事がないのは解っている。それでも一応、ペットの子猫に帰宅を知らせてやる。三階建てで横にも結構広いのでどこにいるのか解らないが、家からは勝手に出られないでの問題ない。

「今ご飯作るから」

返事は返つてこないと解つていても、ついつい話しかけてしまう僕。自室に鞄を置いて、制服からルーズなパークーとズボンに着替え、僕はキッチンに向かった。

オール電化のキッチンで、調理器具はそこそこある方だと想う。炊飯器でご飯を焼き始めながら、晩ご飯を何にするか考える。

「タマネギは辛いから黙田つて言つてたか……」

じゃあネギトロ丼こじよつ。タマネギが黙田なら、長ネギを食べれば良いじゃない、なんて言つてみる。言つてる事は違うけど、意味的にはマコーランツワネットと似たような事をしている。

「「「飯だぞ〜」

僕がそこそこ大きな声を張り上げると、虚しく僕の声が家中に響き渡った。

じばらぐ、嫌な沈黙が家の中に漂つ。と、一階から重い足を引きするように、気が乗らないと態度で示しながら、ペットが降りて来た。いつも通り、可愛気がない奴だ。

「いただきます」「……」

僕が喋って、ペットは何も言わなかつた。

つゆを掛けて、ネギトロがご飯の熱でシーチキン色に変わる前に頂く。ちなみに、長ネギは入れなかつた。でもトロ丼は変なので、ネギトロ丼と呼称する。

「いらっしゃいました」「……」

僕が喋つて、ペットはやっぱり何も言わなかつた。けど、少し頭を下げる、ような気がした。きっと氣のせいだらうけど。

茶碗洗いをしながらお風呂を入れ、お風呂に入つたあとそのお湯を使って洗濯をする。節約節約。基本的に夜中はさつと寝る。電気代が勿体無いからだ。そのかわり、朝早く起きて好きな事をするようにしている。そして学校でも寝る。

実は、彼女の家で従者をやっていたのは、もうとっくに首になつていたのでした。

貯金は結構あつたのだけど、僕には収入と言つものが無かつた。バイトをしようといき気力も沸かなかつた。学校で禁止されていたし、それを破つてまで働きたいとも思わなかつた。

そう、やつぱり僕は「怠惰」だつたのだ。

「今日も平和な一日だつたよ」「……」

そう言いながらペチトのお腹を足で突つく僕。鬼畜だ。
無言で何か言いたそうに僕を睨む子猫ひやんのお腹をぶみぶみ
する僕。やっぱり鬼畜だ。

まあ、だつて、悪魔の契約者ですから。

まぐれで出来る事 a - 5 (後書き)

次回から、『超能力』が話に絡んできます。

幕間 a・b

これからのは話、それはどうじょうもない物語だ。

僕はどうじょうもなく狂っていた。

どうじょうもなく狂いながらも、精一杯生きていた。

そして、幸せつてものを追い続けていた。

幸せはやっぱり身勝手なものだ。

僕はそれで幸せだけど、それで他の人はどうだったのか考えると、

きっと不幸だつたんじゃないかと思う。

僕は遠慮しないし、全て本気で行動した。

それが狂っているんだけどね。

けど、彼らはどうだつたんだろう？

彼らは遠慮していたような気がするし、他人の不幸つてのを考え
て行動していたと思う。

僕には、それが辛かった。

遠慮せずに何でも言つてくれれば、僕なんてサンドバック程度に
思つていってくれれば、それでいいのに。

だから僕は、遠慮する事を無くしてあげた。
いや、人の心つてのを弄んだ。
だから。

これは、悪魔の物語。

「ですから、あなた方のしていることを公表すれば……どうなるかわかりますよね？」

男は片膝を付き、野心でぎりぎりと光る瞳でじらりと挑発的に見ていた。

ああ、ここにつやつやけいと僕は無表情で男を見ていた。

彼女の家は表向きには大手製薬会社だった。だが、どうか想像通り、裏では違法薬物の売買、また戦争向けの薬品、そこから派生したのか兵器までもを手にかける、裏世界のトップだった。

男は大手製薬会社でありながら、そのような裏を持つ会社のトップである彼女を齎して、うはうはな生活を求めていたようだった。男の目を見る限り、金ばかりが彼女自身も頂こうと言わんばかりだった。

「そうね。じゃあ……」

そんな男の熱い態度に対し、彼女はびくともせぬ一つの弦いた。

優雅に足を組んで、玉座を思わせる椅子に座っている彼女。薄桃色の唇に添えられた右手には金色の指輪。

どこの王様のような彼女は、この屋敷では文字通り王様だった。彼女は口を歪め、そして『言葉』を口にする。

「あなたは私の奴隸になりなさい」

あつ、ここ終わったな。

僕はどこか冷めた感想を心の中で抱いた。

正直、男の事は初対面で碌な評価を『えていなかつた。

「は？……ひつー？」

男が怪訝そうな言葉にならない声を漏らしたのと、それは同時だつた。

右手の指輪が、神々しさとは別の、淀んだよつた金色の光を發した。

途端、男のざわざわしていた田がぼんやりと虚ろな田に変わる。そして先ほどの霸氣の有る口調が嘘のよつに変わつた。

「……はい、お嬢様」

「さつよ。ゆく出来ました」

彼女は妖艶な笑みを浮かべた。
僕は無表情で俯いていた。

僕は知つている。

彼女はこれでまた良い捨て駒が増えたと喜んでいるが、それは勘違いも甚だしい事に。

確かに彼女の命令は絶対で、彼女自身がその命令を破棄するまでその命令は続く。命令された者の行動には、命令に逆らつと言つ選択肢が消滅する。それは命令された事を忠実に行なう従順な手駒に見えるだろう。

だが、この「傲慢」な能力にも欠点、といつよりも弱点が存在している。

それは、命令された者は、その意識を持つてゐることだ。命令を実行中の記憶はちゃんと残る。ただ、自分の身体が想い通りに動かないくなるだけなのだ。

だからそう、彼女の命令が破棄された時、その命令が破棄された人はどうするだろう？自分の身体を好き勝手に操った彼女を、どう思うだろう。

実際、命令を受けてそれを実行した直後、彼女に刃を向けた者もいた（それは非常に邪魔臭いので、僕が彼女に見つからぬ場所でひつそりと処分したが）。

彼女に奴隸命令を受けた者はこれで二十一人目。

奴隸命令は、絶望的だ。

生命活動以外、全ての自由が失われる。どれだけこき使われても何も文句は言えない。

自殺の権利も、剥奪される。

それでも、彼らは彼女から見えない場所では自由がある。

彼女に対して陰口を言う事は出来る。

それを浴びるのは、奴隸ではなく、彼女のお気に入りの僕なのが。

「あなた、私の執事になつて」

そう言われた僕は、奴隸よりは自由度がある。

執事は主人のためにならばどんな行動も許されるのだ。

彼女のためであれば、何だって出来るのだ。

ただ唯一出来ないのが、正直な気持ちを話せない事だった。

「傲慢」

おごりたかぶつて人を侮り、人を見下すこと。

お嬢様は夜型人間。朝が近づくと就寝モードに入る。僕はお嬢様がちゃんと寝るまで側に居なければならぬ。代わりに、お嬢様が寝ている間は自由だ。

といつても、完全に自由にされた訳ではないのだけれど。

薄桃色のネグリジェ姿のお嬢様が言う。

「おやすみのキスは？」

「どうぞご自由に」

そう言つて僕は目を瞑つてお嬢様に顔を塚づける。
何故かその反応にむすつとするお嬢様。子供のようにふくつと頬を膨らませ、そっぽを向いて寝に入ってしまった。

僕は顔を離し、お嬢様の寝息が聞こえるまでお嬢様の部屋に居る。お嬢様の部屋は豪華であるが、どことなく貧相でもある。

部屋の物一つ一つは、それこそ机から戸棚、ベッド、枕からシーツに至るまで一つ一つが高価であるが、何ぶん部屋が広すぎる。彼女の私物は少な過ぎた。部屋に対して家具は一割程度しかないのである。部屋がガランとした印象を受けるのだ。

お嬢様の部屋に窓はない。天井にぶら下がるシャンデリアが唯一の照明で、今はそれも消えている。そのため、お嬢様の部屋の中は真つ暗だ。

朝日が昇るうかと言う時刻を腹時計で確認した頃、やつとお嬢様の寝息が聞こえてきた。

「おやすみなさいませ」

僕はそう頭を足れ、そそくさと部屋を後にした。

豪勢な真っ赤な絨毯の屋敷の廊下を急ぎ足で踏みしめ、屋敷内、お嬢様の部屋と同じ階の隅の部屋、僕に割り当てられた部屋へと向

かつた。急がなければ学校に遅刻してしまつ。

僕が自分の部屋だと思ってノック無しに開けた部屋の中には、一人の少女がいた。

が、僕は無視して着替えを始める。

「あなたは、どうしてこの家に？」

僕が着替えをしていると言うのに気にせずそう尋ねて来たのは、黒のスーツで身を包んだ小柄な少女だ。嬉しい事に、彼女は僕よりも背が低い。それだけで凄く可愛く見える。笑えばとても可愛いと思うが、生憎彼女は表情を忘れてしまったようで、いつ見ても無表情だ。

僕と同じかそれより一つ年下か。彼女は僕の後にこの家に来た従者で、僕の部下と言つ位置づけだ。

「それを聞くのはやぼじやないかな？ 君だつて答えたくはないだろ？」

「私はお嬢様を殺すために来ました」

「……何即答してゐるんだよ。それじゃあ僕も答えなくちゃ駄目になるじゃないか」

「では、お答えください」

相変わらず幼さのない可愛げもない口調だ。彼女の冷たい声色は話し相手を選ぶ。

どうにも事務的な話し方しか出来ないようなのだ。従者の仕事上、それには文句を言うまい。

だが、少しくらい甘えてくれたつて構わないのに。

一応僕は上司だったので、部下の無愛想な態度を心配していた。いや、ただ単純に彼女の笑顔が見たかつただけかもしけない。

「来てつて言われたから、かな

言われなくても来ただろうけど。

僕は執事服から学生服へと着替えながら、僕の着替えを恥じらいつ
事無くじつと見つめてくる少女に答える。

なんか、いくら言つても聞いてくれないもんだから、慣れけやつ
た。

ちなみに、彼女はどうにも羞恥心と言つ物を無くしたようだ、自
分の着替えを見られてもこんな感じだ。

え？ 何故知ってるかって？ そいつは、野暮な質問だろ。
僕は学生服に変な所がないか確かめ、少女に笑顔を向ける。

「じゃあ僕からも質問。どうして君は「強欲」の力に手を出したん
だ？」

「……」

答えない少女見て、僕は安堵の溜息をついた。

もし君が答えたのなら、僕も答へなくて済むだらうな。
なぜ僕が狂つたのかを。
狂つた僕は彼女に言つ。

「いらなくなつたいつでも言つてくれ。僕がその罪を背負つから

「……」

金さえ払えば誰であつても殺してみせる、そんな殺し屋だろ、君
は。

それつてさ、狂つた僕から見てもや。辛いだろ？

「強欲」

欲が深い事。欲しがるために、勝ちに来ます。

「正解。さすがだ！」

黒板から自分の机へと戻り、僕は席に着いた。

クラス中から何らかの視線が僕を射抜いている。僕は照れたよう

に笑みを返した。

僕は優等生を演じている……訳ではない。高校生活を送れるなん

て夢のようだったのだ。だから、その生活が勉強が解らないなんて

事で崩れないように頑張った。その結果が、俗に優等生と呼ばれる

状態になつただけだつた。

そして気がついたのだ。

優等生は、クラスから疎まれる存在だということに。

見本がすぐそばにあると、先生達は声を揃えてこういう。

『あいつを見習え』と。

それが青春を謳歌したい高校生には鬱陶しいつたらないのだ。と

いうか、規則なんかにちゃんと準ずることが嫌なのだ。理由はなん

となく。

だから僕には友達は居ない。

僕は付き合いが悪いし、しううがないのだ。

別に、高校生の友達が欲しいとも思わなかつた。

僕にはたくさんの部下が居た。信頼関係もかなりのものだと思つ

ていた。

お嬢様が捨て駒のように扱う彼らを、お嬢様の屋敷に居る皆がゴ

ミのように扱う彼らを、僕だけは一人一人と向き合つていたからだ。

……ああくそ、やつぱり訂正します。

僕は、やつぱり友達、高校生の友達が欲しかつた。

あれ？ そう言えばいるんだつた。

でもなあ、なんか、幼なじみつて友達つてのとは違うような気が

するんだよな。僕は純粹に、高校生になつてからの友達が欲しかった。

結局、高望みだとは思つていただけど。

「よつ。相変わらず勤勉だな。正直俺には無理だぜ」

休み時間、そう言つて親友は僕の肩を叩いて来た。

僕は休み時間に次の授業の予習をする。実際の所、放課後にすること時間がないだけなのだが、どうにも皆勘違いしているようだった。授業内容は習いながら反復し、その日のうちに覚える。宿題だつて学校で終わらせる。

そして放課後、僕は帰宅部なので急いで帰るのだった。

「勉強した学校に来てるんだから、当然だろ?」

「……いや、それは当然とは言わないんだな、今の日本は。高校は青春を謳歌する場所であつて、勉学に励む場所ではないのだよ。勉強なんてやううと思えば、いつでもどこでも出来るんだからさ」「そう思わないから、学校で勉強するんだろ?」

「優等生の解答とは思えないな……」

「別に、僕は優等生じやないよ。それだったら、委員会くらいい参加しているさ」「ひひひ

そう、僕は委員会には参加していない。部活にも参加していなかつた。

参加する時間がなかつたから。

ちなみに、本来なら優等生がいるべきクラス代表のポジションに居るのが、この親友だつたりする。彼は、

「お前がクラス代表やるくらいなら、俺がやるー」

と言つて勝手に立候補した猛者だ。

僕の何が気に喰わなかつたかは知らないが、正直助かつたのだつた。

クラス中の僕を推薦しようと言う視線が、溜まらなく辛かつたから。

それを察してくらたと思いたい。

なんだかんだ言つて、彼は僕の大切なもう一人の親友だった。

放課後のチャイムと共に、僕は急いで学校から飛び出した。

お嬢様の睡眠時間を考えれば、取り立てて急いで屋敷に戻る必要はない。それに、僕の勤務時間は二十時からとしてももらっている。けど、僕は急いだ。

僕の唯一の家族、妹に会うため」。

妹とは学校の関係で別居中、保護者はお嬢様に頼んで誤魔化してもらっていた。

一階建てのお世辞にも褒められないボロアパートの一室、そこに妹は住んでいる。

時刻は五時を回った頃だった。妹も部活はしていないし、恐らく居るだろう。

「……ただいま」

僕はなんと口にするか躊躇したが、ドアを開けながらだったのでその逡巡は解らなかつただろう。

「おかえり、お兄ちゃん！」

僕が扉を開けると同時に、部屋の中を確認するよりも速く、何かが僕に飛びかかって来た。ぎゅっと抱きしめられ、柔らかい感触が胸の前に当たる。

「あ～、恥ずかしいからやめて。でも出迎えありがと」

僕はそう言って、飛びついて来たその人物の頭を撫でた。

セミショートの黒髪、巣廻目無しで可愛い顔。小動物のような保

護欲をそそらせる雰囲気がある。

妹だった。

妹、といつても双子の妹で、……正直、妹って何だろう、家族つて何だろう？ そんな事を考えるレベルだ。よく分からぬ。ただ一つ言えるのは、幸せになつてほしい、僕の一一番大事な人だと云つ事だ。

「ごめんな。バイトでしばらく会えなくて。寂しくなかつたか？」

お嬢様の家で働いている事は黙つている。

理由は、妹とお嬢様の仲がよろしくないからだ。

また、そのせいでも僕は毎日妹に会えない。毎日妹と会つてると、お嬢様が怒るのだ。お嬢様には感謝しているので、逆らえなかつた。

「大丈夫。彼がいてくれるから」

彼と言つのは、僕のもう一人の幼なじみの親友で、会社に勤めている奴だ。

僕はそいつに妹の面倒を見つめている。ちなみに、年はみんな同じで、十六だつたりする。法的に厳しい所があるため、お嬢様に頼つっているのだ。

「晩ご飯どうするの、お兄ちゃん？」

そわそわとしている妹を見て、僕は笑みをこぼした。

そう言えば、最近は外食ばっかだつたな。久々に家で食べたいのかな？

「たまには僕が作るよ。なんか食べたい物あるか？ 一緒に買い物に行こう」

「うん！」

買い物の間、ずっと一人で手をつないでいた。

買い物のおばちゃん連中には、仲のいい兄妹だことなどと言われた。僕は照れ笑いを浮かべ、妹は「機嫌そうに腕を絡めて来た。少し胸が当たつていた。

僕らは一卵性双児で、とっても良く似ている。だから恋人とは言われず、兄妹だって解つたのだろう。おばちゃん達の推理力に脱帽した。

「……お兄ちゃん、私より料理上手だ……」

「どこかしょんぼりとした風に、けれど美味しそうにオムライスを頬張る妹眺めて、僕は凄く幸せな気分だった。だから、そんな幸せを妹にもわけてやりたかった。

「ありがと。そうだな、今度の日曜日、僕が料理教えてやろうか?」「いいの?……バイト、ない?」

上目遣いで小首を傾げる妹は、本当に可愛かった。僕は緩んだ頬を隠すために、笑顔を見せる。……隠せてなくない?

「大丈夫。あつ、日曜日は一日休みにするから、どこか行きたいとかあつたら、そっちにするよ?」

「うん!! 料理、教えて!」

必死に首を振り、妹は僕に手を合わせて来た。さては、と僕はにやりと笑みを浮かべる。

「なんだ? あいつに美味しいご飯を食べてほしいとか?」

「ふふっ！ ち、ちつ、ちが……」

吹き出す妹、隠さなくて良い。

あいつこと、僕の親友。妹は前から彼の事が好きだった。勝手に僕がそう思っているだけだが、恐らく間違いない。妹に僕の代わりにあいつに来てもらう事を話した時、凄く喜んでいた。僕もしてやつたり顔をしていた。

ちなみに、彼も妹の事が好きである。これは確定事項。親友だろ話せよこの野郎、と言つて殴りながら話を聞いた。好きだけどなんか文句あるかっ！ といつて殴り返されたので、僕は凄く嬉しかったのを覚えてる。青春してるな、つと思ったのだ。勿論、親友をぶん殴るほど真剣に恋してくれている彼に、こいつなら妹を任せられるな、と思ったのもあった。

だからこそ、妹を一人暮らしにさせず、その親友に同棲させているのでだった。

その彼は今仕事中。どうにもこんな粋な計らいをした僕と顔を合わせづらいのか、最近はなかなか会っていなかつた。

そんなこんなで妹と久し振りの会話はあつという間に過ぎてしまつた。

「じゃあ、今度の日曜日に

「うん。彼にも伝えとくよ」

そう言つて、僕は妹から見送られて屋敷へと向かつた。

僕としては、久々に彼とも会いたかったが、仕事が忙しいのなら仕方ないかと思う。

あいつはいつも、少し真面目過ぎた。

今思えば、これが全てのフラグだったのかもしれない。
全てが狂い出していた、予兆だったのかもしない。

けれど、目先の幸せを追い続けた僕には、それを回避する事は出来なかつた。

勿論、それは皆にも言えた事だつたけど。

この日、一月の終わり。

それから三週間後、三月の終わり。

僕らのうち何人が生き残っているのか、それはまだ解らなかつた。

すべてが出来る事 b - 4 (後書き)

感想や評価が励みになりますので、よろしければお願ひします。

お嬢様と出会ったのは、小学校低学年の時。その日は夏休みの始まりで、天空の城でもありそうな雲が青空にあつたのを覚えている。

僕ら三人は年も同じで、良く似ていたからなのか、幼稚園の頃から三人で遊んでいて、それは中学の終わりで高校生活の関係で別れるまで続いた。

その日も僕ら三人は一緒に居て、ちょっと住宅街を外れた森に遊びに行っていた。子供の時にだけ会えそうな生き物がいる、そんな事を話しながら森を散策する僕ら。三人で手をつないで歌を歌いながら。

と。

「あつー！」

妹が不意に木の上を指差した。僕とアイツもその方向を見た。そして、

「……妖精？」
「いや、人でしょ」

アイツがとぼけて、僕が突っ込んだ。

ただ、妖精と言ったアイツの言葉は、あながち間違いでもないよう見えた。

腰まである綺麗な金色の髪は当時の僕らは神秘に思えたし、お人形さんみたいな可愛らしい顔をしていた。服はフリルのついたドレス。

そして、木の上で震えていたのだ。

「お～い、そんなところで何してるの？」

僕がそう声をかけると、ビクッと震えるお嬢様。そして小さく答えた。

「……お、下りれない」

木の高さは一メートルくらい、今思えばかなり低いが、当時の僕らにはかなり高く見えた。落ちたら怪我をするな、痛いなど僕は思つていた。

けれど、アイツは違つた。

「受け止めるから、飛び降りなよ。それで、一緒に遊ぼ」「え？」

お嬢様はきょとんとしていた。僕らもキヨトンとしていた。けれど、アイツだけは真面目な顔をして手を伸ばしてた。

それが、お嬢様と僕らの出会い。

両親が交通事故で死んだのは、僕達が中学生を終えようとしていた頃だつた。僕らは三人で同じ高校を受けようとしていて、入試のほんの少し前だつた。

けれど、両親が交通事故で死んで、全てが狂つた。

両親はジャーナリストでショッちゅう出かけていた。

大きな仕事があるから、と行って出かけて行つたその日、帰つて来た二人は不自然だつた。僕は少し疑問に思ったが何も出来なかつた。

一日後、二人は車で崖から転落、即死だつた。

そして慌ただしく葬式などをやり終えた頃、僕は遺品整理であるものを見つけた。

タンスの裏に隠されていたそれは、一通の手紙とノート。手紙に書かれていたのは、

「幸せになりなさい」

たつたその一言だつた。手紙はしわくちゃで、何かを書こうとして書けなかつたような不自然な跡が残つていた。

ノートに記述されていたのは、一人の少女の裏事情。

気付かなければ良かつた。

僕の両親はジャーナリストだつた。

両親は、知つてはいけない事を知つてしまつたのだと氣付いた。

そう、この国の裏事情、お嬢様がしていったことに。

お嬢様は何人も人を殺した。それは生命を奪うと言つ意味でもあつたし、人権を奪うと言つ意味もあつた。

だから、二人は殺された。

事故ではなく、二人は殺されたのだ。

両親の調べ上げたあまりにも信じられない出来事、能力……。それらが二人の死を持つて、僕に現実だと教えてくる。

何が何をどうしたらいいのか、一瞬で解らなくなつた。

受験が近い、三人で同じ高校に通う約束があつた。

両親が殺された、理由が理不尽だ、目頭が熱い、拳が重い。収入がない、高校に行けるのか？ 行つてどうする？ お嬢様はどうする？ 親の意志を継いで問いただすか？

僕は何がしたい？

僕は願つた。

幸せが欲しい。

今このこの苦しみ、悩みを解決したい。
それが出来れば僕は——もつ……。

そして、僕は狂った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9810t/>

出来ること、ぼく頑張る

2011年7月4日11時05分発行